

第 18 回なにわ農業賞審査講評

「なにわ農業賞」審査委員を代表して、審査講評を述べさせていただきます。

審査委員会では、客観的な審査基準に基づいて個々の調書を評価し、慎重に審査を行いました。

また、候補者の経営内容や実績だけでなく、更なる経営発展を目指して研鑽されている姿勢や地域農業をリードする活動、大阪農業に対する府民理解の促進など、大阪農業の存在価値の向上に寄与しているかについても、併せて総合的に検討いたしました。

その結果、各市町村農業委員会から推薦のあった4経営体を「なにわ農業賞」にふさわしい経営体であると顕彰委員会に報告することで意見が一致しました。

4経営体は、農業経営をめぐる環境は依然として厳しい状況が続いているなか、いずれも都市近郊という大阪の特徴をうまく活かした経営を行っており、大阪農業の可能性を強く感じさせるものであります。

具体的には、販売動向に留意した生産や、最新技術の導入による栽培技術の向上、経営規模の拡大、新たな販路の開拓など、様々な経営努力をされています。

また、自身の経営確立だけでなく、地域全体を産地として発展させるため、地域特産品のブランド化を図る活動も見られます。

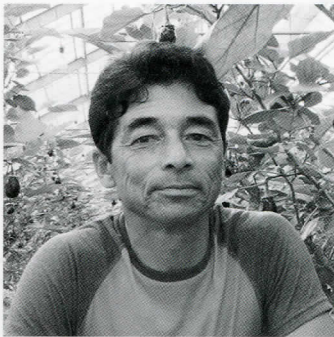
大阪農業の存在価値向上への寄与につきましても、農作業体験を通じた青少年育成や、ホームページやパンフレット等を活用した都市住民への積極的なPR活動など、地道な活動にも意欲的に取り組んでおられます。

このように、大阪農業のPR活動に尽力されている他、地域農業のリーダーとして地域での活動にも貢献しておられることは非常に心強いところであります。

結びとなりましたが、今回受賞された方々がますます研鑽に励まれ、次代の大阪農業を担う若手農業者の目標となつていただくことを祈念いたします。

なにわ農業賞審査委員会
委員長 山本 貞徳

(大阪府農業協同組合中央会専務理事)



はら よ し ゆき
原 世 志 之 氏 (50歳)

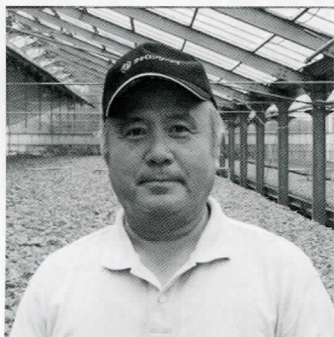
- ◇住 所 岸和田市
- ◇経営概況
- ・主要作目 水ナス、ミズナ
 - ・経営規模 ハウス44アール
 - ・構 成 員 1名

◇経営の特徴

平成4年に就農後、花・水稻・みかんの複合経営から、花のハウス栽培を中心とした経営に転換し、その後、花の経営の伸び悩みから、ハウスを有効活用できる水ナス栽培を中心とした経営に、再度転換するなど常に攻めの農業を実践している。

栽培ほ場を集約し集中管理することで、作業の省力化を実現。水ナスと栽培時期が競合しないミズナを導入し、経営の安定を図っている。

岸和田市農業研究クラブ連絡協議会の会長として農業関係者の交流や若手農業者の育成に尽力している。



きた の しょう いち
北 野 彰 一 氏 (58歳)

- ◇住 所 貝塚市
- ◇経営概況
- ・主要作目 ミツバ、水ナス、シュンギク、米
 - ・経営規模 田108アール (ハウス38アール)
 - ・構 成 員 7名 (夫婦、母、長男、臨時雇用3名)

◇経営の特徴

代々農業を営む氏は、平成元年に30歳で就農して地域の特産物であるミツバの栽培を開始し、施設野菜の経営規模を拡大するとともに、経営の中心を父から譲り受けた。また、今年の4月に長男が就農しており、長男の自立を後押ししながら、経営規模の拡大を目指している。

水利組合長や貝塚市認定農業者協議会会長を歴任する一方、警察署からの依頼で、青少年の農業体験 (田植の指導、水田の管理) を通じた青少年育成に協力、収穫した米を福祉施設に寄贈する等、社会貢献にも尽力している。





あか い たか お
赤 井 隆 夫 氏 (59歳)

◇住 所 泉南市

◇経営概況

- ・主要作目 花卉 (アイリス、グラジオラス、リアトリス、ユリ)
- ・経営規模 ハウス45アール
- ・構 成 員 4名 (夫婦、子2名)、臨時雇用 若干名

◇経営の特徴

昭和63年に父の後を継ぐことを決意し、脱サラして就農。当初は水稻・タマネギ栽培が中心であったが、農業所得の増加・将来性を考慮し、また当時の花卉部会長の勧めもあり、同市で盛んであるアイリス・グラジオラス等の花卉栽培へ経営転換した。

品質の向上・安定出荷を行うため、ハウス栽培と露地栽培を効率よく併用。後継者も育ってきているため、新しい品種にも取り組むなど計画的に耕作面積を増やし経営規模の拡大を図っている。



あさ おか こう じ
浅 岡 弘 二 氏 (43歳)

◇住 所 富田林市

◇経営概況

- ・主要作目 トマト、ナス、キュウリ
- ・経営規模 田20アール、ハウス80アール
- ・構 成 員 11名 (本人、常時雇用4名、臨時雇用6名)

◇経営の特徴

平成9年に就農し、平成16年に父親から経営を受け継いだ。

平成11年～14年に大型鉄骨ハウスやパイプハウスを新設し、それまで25アール程度であった経営規模を50アールに拡大。現在は、約80アールでトマトを中心にナス・キュウリを栽培し、JA出荷だけでなく、飲食店、百貨店などとの直接取引も行っている。

就農当初から4Hクラブ活動に参画し、全国農業青年クラブ連絡協議会会長も務めた。現在は、JA大阪南茄子部会の役員として地元学校給食への提供を通じて食育に貢献するなど、地域農業の若きリーダーとして活躍している。

